令和２年１月２８日発行

北代縄文館　ミニ企画展

奈良時代の北代遺跡

北代遺跡の位置（図１）

北代遺跡は、長岡丘陵上の標高約１５～１７ｍに所在します。遺跡の南側は、呉羽山頂上の北端部から延びる広い谷に面し、北側は小支谷（しょうしこく）になっており湧水地が存在し、遺跡の立地に適した場所といえます。

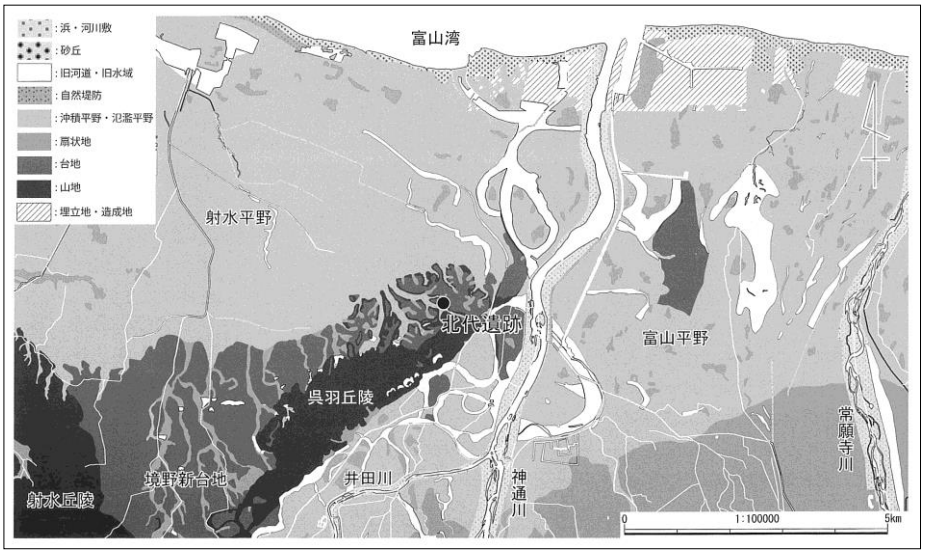

図１　地形分類図

図２　奈良時代の遺物（中央上：長胴甕（ちょうどうかめ））

北代遺跡の概要

北代遺跡は、明治 40（1907）年に発見され、富山県の考古学の草分けである早川荘作（しょうさく）（1888～1978）により広く知られるようになりました。

昭和５９（1984）年には、北陸の縄文時代中期集落の構造を解明する上で重要な遺跡として国史跡となりました。

これまでの発掘調査では、縄文時代の遺構等が最も多く、竪穴住居跡７８棟、高床建物跡４棟を確認しており、縄文土器や石器なども多数検出しています。

また、北代遺跡は、旧石器時代、縄文時代（早期・中期・後期・晩期）、弥生時代、奈良～平安時代、江戸時代の長きにわたり、連続と中断をくり返しながら形成された遺跡でもあります。

奈良時代の北代遺跡（図２・３）

昭和５３（1978）年度の調査では、奈良～平安時代の竪穴建物跡を５棟検出しました。建物跡は、ほぼ方形をしていますが大きさは不明です。建物跡の分布は、縄文時代の集落跡の外側にあり、西側（１棟）と南側（４棟）で、南側は谷に近い位置となっています。遺物は、建物跡から

多く検出し、土師器の長胴甕片・坏片、須恵器の鉢片等です。

昭和５４年度の調査では、内部に炉跡がある奈良時代の竪穴建物跡を１棟検出しました。方形の建物跡（１辺約４．２ｍ）から、鉄滓（製鉄時の不純物）や釘状・鎌状鉄製品、羽口（ふいごと炉の間に付ける道具）を検出しており鍛冶工房跡と推定できます。

平成８（1996）年度の調査では、奈良時代の方形の竪穴建物跡２棟（住居状・１辺約２．５ｍから３ｍ）を検出し、奈良時代には集落の中央部にも建物があったことを確認しました。また、平安時代の大きさ不明の掘立柱建物跡や長胴甕片等を検出しました。

平成１１年度の調査では、奈良時代の竪穴建物跡１棟（住居状・推定１辺４．９ｍ）と土師器の長胴甕片、須恵器の甕片・坏蓋片、鉄滓等を検出しました。

奈良時代の北代遺跡は、竪穴建物（住居）や開墾に必要な鉄の道具等を製作したと考えられる鍛冶工房など、住居とともに生産施設も造られ、開墾を進める農村的な集落としての性格が強くなり始めます。

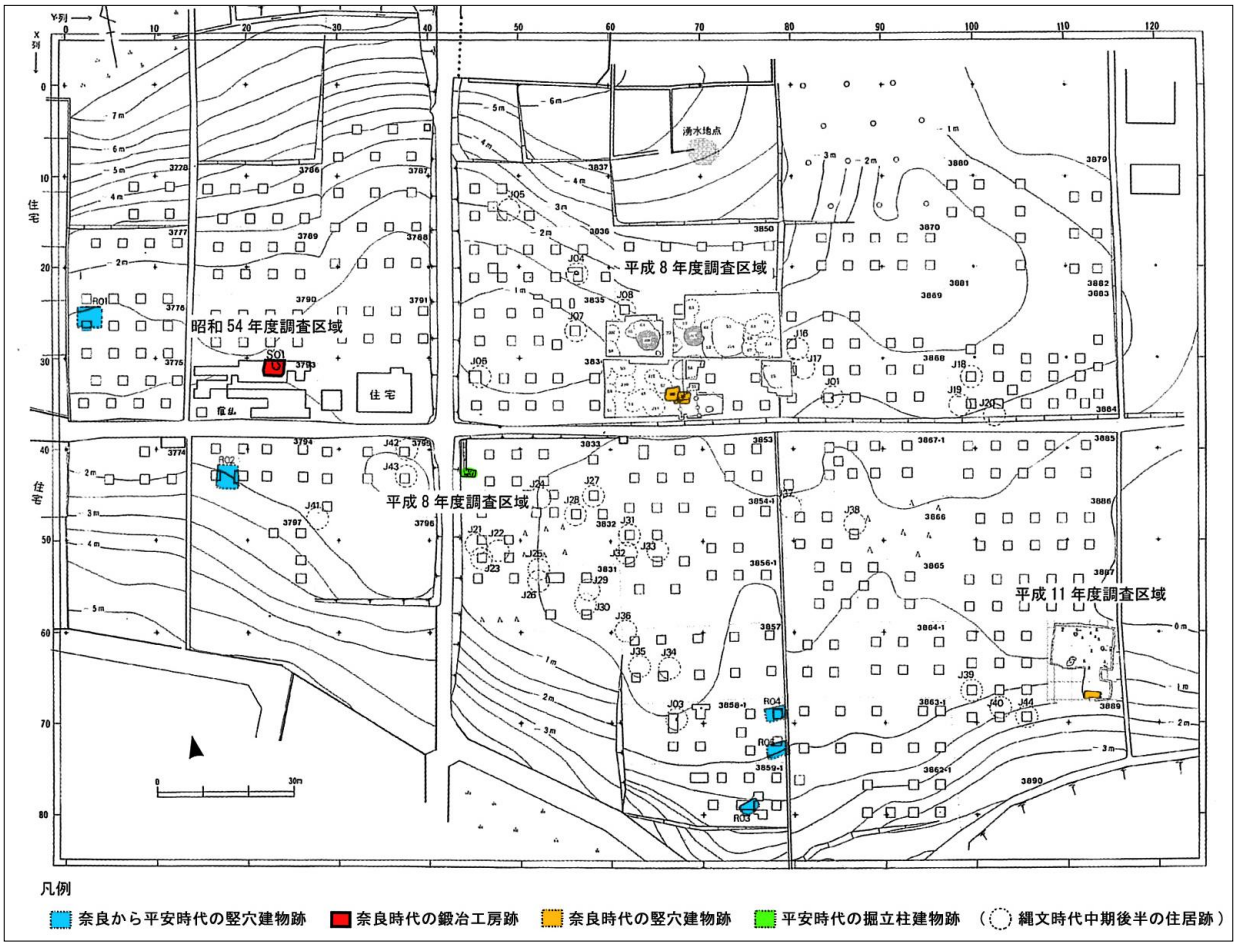

図３　北代遺跡の奈良から平安時代の遺構

主要引用・参考文献

富山市教育委員会　1979『北代遺跡試掘調査報告書』
富山市教育委員会　1980『富山市埋蔵文化財調査報告書 今市遺跡・北代遺跡』
富山市教育委員会　1981『富山市埋蔵文化財調査報告書 北代遺跡』
富山市教育委員会　1997『史跡北代遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会　1998『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ』
富山市教育委員会　2003『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ』

https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm

編集・発行　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

以下参考
また、北代遺跡に近い長岡杉林遺跡では、平安時代中期の祀堂（祖先や神仏を祭る所）と推定される建物跡が検出され、瓦塔・緑釉陶器（碗・火舎：香炉の一種）灰釉陶器（碗）など仏教的色彩の濃い遺物が出土しており、一般的な開墾集落とは異なる拠点的集落と推定されます。

・・・含めた農村集落的側面の強い集落が営まれます。